

郷土人形

魅せられた男たち



江戸時代から大正時代にかけて作られたおひなさまなどの郷土人形を、郡内の会社員らが収集、研究を続けている。素朴な味わいが魅力の人形も、古いものは減少の一途。愛好家は「郷土人形は日本の美術遺産。後世に伝えたい」と情熱を傾けている。もうすぐひな祭りー。



土人形のひな人形。上流階級の風習が庶民に広まったのは安価な土人形のおかげという

来歴を解き明かす喜び

「研究会」で図譜出版、博物館の夢も

「新潟の土人形の庶民的でほのほとした味わいが好きなんです」

「人形の宝庫・東北産の程よく洗練された雰囲気もいいですよ」

東京都あきる野市の都職員 堺谷英治さん(西)と北区の会社員 宮川尚久さん(西)。自慢のコレクションを手に、郷土人形の話が始まると止まらない。それぞれ二十年以上の収集歴があり、おひなさまや七福神など、約二百体を持っていく。

ともに「日本郷土人形研究会」のメンバー。郷土人形を、こけしや凧のように独立したジャンルとして研究し後世に伝えようと、七年前に発足した。会員はいずれも郷土がファンで、特に人形が好きな会社員ら男性六人が集まった。

郷土人形は、江戸時代の後訪ねてけげんな顔をされた人、人形自体を知っている人がいなかったり。

「地方によっては今でもひな祭りに飾っている家もありますが、年々失われている。旧家を訪ねて、最近括てしまったとか、焼いてしまった

「家族の理解にも感謝している」と話す、宮川さん(左)と堺谷さん(事務局を置く東京・文京区内の工芸家宅で)

期から明治、大正期に各地で庶民に親しまれた人形を指す。粘土を焼く「土人形」、紙で作る「張り子人形」、おがくずをのりで固めて作る「練り物人形」などに分けられる。土人形では、仙台の「堀人形」と京都の「伏見人形」が代表的だが、詳しい産地や歴史など不明のものが多く。

「新作ではなく、その時代にその土地で生きていた人形にひかれます。美術的に鑑れたものも多く、私にとっては浮世絵に引けをとらない日本の貴重な遺産」と宮川さん。五年前に、会で郷土人形を産地ごとにカラーで紹介し解説した「郷土人形図譜」を創刊。堀人形、「伏見人形」、「栃尾人形」(新潟県)など、澁川原人形(山形県)など七巻を自費刊行している。

メンバーは休日を利用して産地に向いては、人形作りの歴史など調査を重ねてきた。骨とう市、民具店、旧家を訪ねて人形を探し、土地の人の話を聞く。

例えば、「栃尾人形」。旧家など手軒以上も回り、薄らと新潟地方の人形としてしか知られていなかった土人形が、栃尾市周辺に集中していることを突き止めた。

ただし苦労は多い。民家をという話を聞く度に悔しい思いをする」と堺谷さん。

収集家は全国に約千人。昨年、「図譜」の購読者のうち約七十人が東京に集まり、人形のオークションなどを行って親交を深めた。同研究会では、子供がまま、と遊びなどは広がっている。

に使った紙人形「姉様」を紹介する単行本を出版する予定だ。「郷土人形のすばらしさをもっと多くの人に知ってもらい、将来は、『日本郷土人形博物館』の建設を」という声もあり、メンバーの思いは広がっている。